

作物名：ねぎ

病害虫名：べと病（病原：*Peronospora destructor*）



葉の病斑



発病後期の病斑



べと病菌の分生子
及び分生子柄

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉、花梗、葉鞘に発生する。本病に罹病すると葉が黄白色のぼやけた退色病斑を生じ、白色の薄いかびを生じる。病斑と健全部との境界は不明瞭で、症状が進行すると灰白色状葉枯れ症状を示し枯死する。発病後期には二次的に雑菌が生じて黒色のかびに覆われることが多い。
- ・全身感染した冬越し株は、生育が停滞して草丈が低く、葉全体が厚みを増し、白色から黄色に変わる。下葉1～2枚は健全な場合が多く、葉の一部が黄変すると、その部分からわん曲する。このような株は、春季、秋季に降雨が続くと葉の表面に薄いかびを生じ、黄変して枯れ、特に病斑は生じない。

2 伝染源及び伝染方法

- ・罹病葉上に形成された卵胞子や菌糸体で越冬し、翌春の第一次伝染源となる。発病後は、病斑上に形成された分生子が飛散し、二次伝染を繰り返す。分生子の飛散は昼間に多い。
- ・土壌中に被害残渣が残ると伝染源になるので、連作ほ場では発病することが多い。
- ・ネギのほか、タマネギ、ワケギ、ノビルに寄生するが、ニラ、ラッキョウ、アサツキにはほとんど寄生しない。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種でべん毛菌類に属し、分生子と卵胞子を形成する。分生子の発芽適温は約10℃、形成適温は13～15℃で、湿度は90%以上のときによく形成される。卵胞子は、一度低温に遭ったのちに20～25℃にすると、よく発芽する。
- ・多湿条件を好み、平均気温15～20℃で降雨が続く場合に発生が多くなるため、梅雨期や秋雨期には多発しやすい。
- ・特に秋季に発病した株が冬を越すと春季に多発することが多い。

4 防除対策

- ・多湿条件で発生しやすいので、ほ場排水及び通風を良くする。
- ・苗床で厚まきや多肥とすると発生しやすいので避ける。
- ・発生前または発生のごく初期から薬剤散布を行う。
- ・秋季の育苗中に発生した場合は、越冬後の春季に多発するおそれがあるので、薬剤による予防散布を行う。

5 出典

(1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-②（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編4（農文協）

(2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影